

寺崎 浩 井伏鱒二 跋

戦争の横顔

陸軍報道班員記



真珠湾奇襲以前にひそかに東南アジアに送られた作家・詩人・ジャーナリストたち——陸軍報道班。そのなかうごめくみにくい葛藤と骨髓に徹する恨みの数かず。それは、もうひとつの戦争の顔である。「虚構を排除して、絶えず無言の抵抗をつづけて来た真の記録」(井伏鱒二)

筆者紹介

寺崎 浩 1904年岩手県に生まれる。早稲田
大学仏文科中退。作家。日本大学講師。おもな作品に
「祝典」「遙かなる漂流」

戦争の横顔——陸軍報道班員記

1974年8月15日 第1刷発行 ￥1300
1979年6月15日 第4刷発行

著 者 寺崎 浩
発行者 東京都千代田区神田神保町1-46 崔 容 徳
印刷者 東京都文京区後楽2-11-2 道野整版所

発行所 東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル
株式会社 太 平 出 版 社 ©

電話 03-295-3531(代表) 振替東京1-99563

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

シリーズ●戦争の証言①●

太平出版社

寺崎

浩

井伏鱒二 跋

戦争の横顔

陸軍報道班員記



上 1942年シンガポールで（前列左から 井伏鱒二、著者、藤田嗣治、宮本三郎、栗原信、
後列左から 一人おいて長屋操、一人おいて北町一郎、堺誠一郎） 下 1942年当時のペナ
ン市街

南航スユニ



第 1 号	第 2 号	第 3 号	第 4 号
南航スユニ	南航スユニ	南航スユニ	南航スユニ

南航スユニ
南航スユニ
南航スユニ
南航スユニ

わしと徴用組の一人だ

徴用組の一人だ
徴用組の一人だ
徴用組の一人だ
徴用組の一人だ



添船長語る

和 船長は、南洋に船出し、
六 船長は、南洋に船出し、
五 船長は、南洋に船出し、
四 船長は、南洋に船出し、
三 船長は、南洋に船出し、
二 船長は、南洋に船出し、
一 船長は、南洋に船出し、

女のーリバ



三分間、船長は、
三分間、船長は、
三分間、船長は、
三分間、船長は、
三分間、船長は、
三分間、船長は、
三分間、船長は、

△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、



海軍寺潮五郎
海軍寺潮五郎
海軍寺潮五郎
海軍寺潮五郎
海軍寺潮五郎
海軍寺潮五郎
海軍寺潮五郎

△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、

△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、
△南航スユニ、

跋

昭和十六（一九四一）年十一月中旬、私は寺崎君と同じ徴用部隊に入れられて同じ輸送船に乗せられた。同勢百二十人、大阪港を出て、海南島からサンジャック、サイゴン、再びサンジャック、タイ国のシンゴラ港という順に南行し、マレー領に入ってアロルスターで前線の本部に追いついた。これを進軍と称した。ところが私たちの部隊のなかに三人組といわれる異質の者がいた。これが寺崎君を不当に迫害した。寺崎君としては恨み骨髓に徹した筈だ。

この書物のなかで、寺崎君はその三人組の名前と寺崎君自身の名前を変名で書き、その他の人は私の知る限り実名で書いている。虚構を排除して、絶えず無言の抵抗をつづけて来た真の記録を書く覚悟で取りかかったものと思われる。

三人組の者は初め何のきっかけで寄合ったのか私にはわからない。入隊するまで三人はお互に顔も知らない間であった筈だ。それが入隊すると早々に組を組んで輸送指揮官に取り入った。この三人はみんなから嫌がられたが、彼等はそんなことにはお構いなく、スコールを防ぐ用品だといって油紙や人絹のカップを街で大量に仕入れて来て気の弱い徴員に売りつけ、戦地に行くときなど「隊長殿、背中を流しましょう」といって、ドラム罐の風呂に入っている隊長でもない士官の背中を流したりした。人類愛の発露によるものではない。気の弱い徴員にも現地人にも八つ当りに当たっていた。寺崎君はその事実にもちよっと筆を触れている

が、根が詩人だから好みの省略法によって簡潔に書いている。そればかりでなく、寺崎君自身が迫害されるに至った理由や経過も至極あっさり書いている。淡白佳良の主義によるものである。すなわちその部分は、この書物で見て圧巻とされるべきところである。その事件のとき私たちは不安な気持で、寺崎君は海に突き落されたのではないだろうかと話し合っていた。海南島の三垂港を出て翌日あたりの夜九時頃ではなかったかと思う。消燈後、寺崎君は人に頼まれて来たという男に呼出されて船室を出たが、かなり時間がたっても帰って来なかった。よほど暫くして三人組の一人が船室に入ってきて、ベッドに寝ている者の一人一人の顔を懷中電氣で照らしてまわり、「こら、人の顔に明りを照らすのは誰だ。無礼なことは止せ」と誰かに怒鳴られて出て行った(三人組の者は輸送指揮官から特別の船室を与えられていた)。

もし三人組が寺崎君を海に突き落していたら、わざわざ船室を見まわりに来るわけがない。しかし相手はずるい。空とぼけて、様子をさぐりに来たのかもわからない。私たちは臥ていてそんなことをいい合った。いずれにしても氣になるので、三人四人づれで甲板へ出て「寺崎、寺崎……」と呼んで探しまわった。燈火管制で懷中電氣は点せない。舷の外は暗がりの際限もない大海原である。幾ら呼んでも返事がないので、私たちは愚痴をこぼしながら船室に引返した。他を探していた人も引返して来て、「これは事件だ。寺崎は突き落されたかもしれない」といった。三人組の者に頼まれて呼出しに来た徴員に訊くと、自分は呼出しを頼まれただけで詳しいことは何も知らないといった。これは温厚で氣のよさそうな若い徴員であった。

寺崎君は十一時すぎになって帰って来た。船室は暗がりだが、気配でそれとわかった。「おい寺崎、よく帰って来た。お前、何をしていた」と訊く者がいた。寺崎君は氣のない声で「僕は一人で考えてたんだ。三人組の者が、僕のことを悪い悪いというから、どこが悪いかと考えていたんだ」といった。「お前のどこが悪いというんだ」と訊くと、「彼等はそれをいわないで、ただ悪い悪いというんだ」といった。三人組の者は、船中新聞に諷刺童話を書いたのが寺崎君だと思いこんでいたようだ。それを寺崎君にはっきりいわないで、ねちねちと遠まわしに寺崎君をいたぶっていたものだろう。寺崎君もそのときには三人組の肚のうちがまだわかっていなかったらしい。私はこのときの大略を「南行大概記」と名づける自分の日誌に書いている。戦後、それを雑文として雑誌に発表した。輸送船のなかで徴員たちが日記をつけることは輸送指揮官命令で禁じられていたが、私は輸送船に乗る前から日記をつけていたので書き続けたのであった。自分が早く忘れたいと思う出来事を早く忘れるには、とりあえず日誌をつけるのが手頃の方法ではないかと思う。

私は輸送船に乗込む前から風邪で高熱を出していた。十二月六日頃までは、夜になると機関室のわきの熱氣のこもった鉄板に凭れて通路に寝た。その後は熱も次第に下り、南行するにつれて急速に暖氣が高まったので船室に寝た。海南島に寄港したときにはすっかりよくなって、二日間そこに停泊したので暇つぶしに炊事夫から貰った牛肉の脂身を餌にして、舷から一本釣で釣をした。糸を垂らすとすぐ手応えがあって、シマアジとカツオの間の子のような魚が釣れ

た。濃い瑠璃色の魚である。炊事夫に見せると、塩焼にしてみたいというので炊事夫にやった。寺崎君はその魚を題材に一篇の童謡をつくり、筆者寺崎浩として船中新聞「南航ニュース」に出した。ところが、これと同じ号に、三人組の者を辛辣に諷刺した童話が筆者匿名で出た。

これは徴員たちの喝采を博した。三人組の者は大いに動揺し、この童話の筆者と童謡の筆者は同一人だときめてしまった(それは後日になってはっきりわかった)。輸送指揮官は三人組の者を専ら庇う立場にいたので、「南航ニュース」の発行を即日停止させた。ここで内紛が明らかに表に出たが、輸送指揮官は命令を出すときには三人組の者を通じて出したので、相反する者同士の間諍がますます激しくなった。もともと輸送指揮官は徴員たちを信用していなかった。大阪を出発する前にも、訓辞のとき「お前たちのような反軍思想のやつは危険この上もない。俺は輸送船に乗ったら甲板に出ないようにする。いつ海に突き落されるかわからん」といった。事実、東方遙拝をするとき以外は決して甲板に出て来なかった。

話が横に反れたが、要するに寺崎君は海南島の三亜港で私の釣った魚を童謡で歌ったため、童話の筆者と誤認されて手痛い目に遭わされた。私が瑠璃色の魚を釣ったので、寺崎君は美しい瑠璃色に詩を感じたらしい。もし私が瑠璃色の魚を釣らなかつたら童謡を書かなかつたかもしれぬ。同時に、童話の筆者と誤認されませんでしたかもしれぬ。私が今だに寺崎君に負い目を感じている所以はここにある。

尚、私は寺崎君の本文を追いつながら、三人組と寺崎君とのことについて第三者としての見聞

を書きたいが、ながくなりすぎるので略したい。三人組の者の暗躍ぶりを書いたら長篇になってしまう。

私はシンガポールが陥落した翌々日に入城し、軍所属の新聞社に勤めたり日本語学校に勤めたりした。どちらもうまく行かなくて、後は現地報告の原稿を書くようなふりをしながら、ときどき短文を内地へ送っていた。その間、ペナン島のことも寺崎君のことも知る機会がなかった。横の連絡というものがいっさい断たれていたためである(ただ一つ、三人組の提出した密告書によって寺崎君はペナン島へ左遷され、任官もされなかったという噂は聞いた)。寺崎君が宣伝班長命令でペナン島を引揚げてシンガポールへ来てからも、宿舍の割りあてもされなかった。なぜだかわからないが、司令官を失った通過部隊の兵のようなものであった。だから徴用中の私との密接な交渉は、大阪に集結した日からアロルスターで別れる日までに限られている。

戦後、寺崎君は戦争のばからしさと三人組を扱った短篇を二度か三度か雑誌に発表したが、三人組を扱いかけて、ふと思いとどまったような形のものになっていた。三人組のおそろしさがよくせき身にしてみても、書くのが怖くて、途中から筆を控えたのではないかという印象を得たこともある。一方また、あの何とも無情な日の思いを書かない限り、憤懣すてがたく次の作品に取組む気が起らないのではないかと思つたこともある。しかし今度は冷静に最後まで書いた。書きにくかつたろうが、よく書いた。これで次の作品に取りかかれるものと思いたい。

跋……………	井伏鱒二	7
戦争の横顔——陸軍報道班員記……………		15
あとがき……………		235



園はある大学の講師をしていて、小説論の講義をしていた。教室の窓からは近くのマンションらしい建物だけが見えていて、屋上の洗濯物の揺れているのが見える。その方に眼をやりながら、園は話していた。

園たちの乗せられた輸送船——兵員を戦地に送るため貨客船を改装した船は板を縄で縛って棚にした居間にしろ、食糧や水も足らず、救命胴衣などもまるで足らないのだ。もし魚雷に当たって船が沈められたら、浮いてくる木材や板をつかんで泳げという心細さであった。

園たちの船は大阪港から出たものだが、その前、徴用令書というものをとどけられ、いきなり本郷区役所へ集合を命じられ、身体検査をされたのだ。当面病気がないと見られたものは徴用と決定する。三十二年前だ。

日をきって大阪城へ集結を命じられた。顔ぶれは作家、画家、新聞記者などだ。園たちはすぐ新聞社や雑誌社へ行って「何だろう？」と情報集めにかかった。新聞社も見当がつかない。